

政治に関する大学生の自由記述の分析

東 正 訓

An Analysis on Japanese Undergraduates' Free Descriptions about Politics

Masanori HIGASHI

要 約

本邦初の小選挙区比例代表並立制による国政選挙施行直後（施行日：1996年10月20日）に、大学生（男性102名，女性175名）を対象として、日本の政治や政党について自由記述を求めた。記述内容にもとづき、「問題点の指摘」・「政治不信」・「良く分からない」・「関心をもちたい」・「政党の離合集散批判」・「変わらないのでは…」・「怒っている」・「短めの要望」・「ブラックユーモア」・「無回答」の10グループに分類した。記述内容、性別および支持政党とのクロス集計について分析がくわえられた。

問 題

今日、私たちは未曾有の転換期に直面している。国家間、民族間の紛争から、国内的には平成不況からの景気回復、高齢社会への対応、教育、家族のあり方から、個人の生き方に至るまで、解決が求められる問題が数多く存在している。しかしながら、それらを解決するための政治的、政策的努力がいまこそ必要であるにも関わらず、本邦においては1990年代初頭からの政治的混迷が続いたままである。そこで、この転換期に対応しきれぬのか不安を覚える人も多いだろう。

さて、このような状況下における日本人の政治に対する認知、意識、態度、行動の諸様相においても、大きな変化を見せている。だが、その学問的理解は十分でない。なかでも昨今の選挙のたびに話題となる「有権者（とりわけ若年層）の政治ばなれ」やいわゆる「無党派層」の投票行動など、それらの十分な理解はなされていない。経済学的、社会学的、政治学的なマクロ変数（例：国家の経済状態、政治システム、政治へのアクセスの制度的困難さ、政治文化の違いなど）が有権者の政治ばなれ、政党支持なし層の増加に及ぼす効果の大きさは看過すべきでないが、（心理学的）社会心理学においても「有権者の政治ばなれ」や「無党派層」などは重要なテーマであると認識されている。1993年には、「政治ばなれの社会心理学」というテーマで日本社会心理学会のシンポジウムが開催され、当時本学教授であられた田中國夫先生をはじめ、主だった社会心理学者がパネリストとして示唆に富む話題を提供された（早川、1994）。

現在、社会心理学の試みの中で注目されている動向としては、投票行動の認知社会心理学的接近が挙げられよう。『…有権者は「無知な大衆」でもなければ「合理的な意思決定者」でもなく、「能動的ではあるが限界を背負った個人」』（安野・池田、1997、p.29）であると考えるのが、現在の認知社会心理学の有権者像である。ここで、「…限界を背負った」というのは、人間の情報処理能力には制約が加えられており、Tversky & Kahneman（1974）が提唱したヒューリスティック（発見的簡便法）的判断に代表されるように、心的負担の少ない方法で意志決定を行なう人間観（認知的儉約家：cognitive miser；Fiske & Taylor, 1984）である。その人間学的意味としては、認知的負荷を減少させるという利点とともに非合理的な決定を導く可能性があるという欠点をあわせ持つということである。cognitive miserという人間観は、政治や社会事象に専門的な知識を持たず、日常生活に多忙な市民の政治認知（political cognition）をうまく描き出す可能性も指摘されている（亀ヶ谷、1995）。

一方、従来からの（個人差の法則性に関心を持つ）政治的態度研究の系統においても、政治的無関心、政治ばなれ、政治不信を説明するための心理変数は数多く提案されているが、ソ連邦崩壊後、保守主義、社会主義・共産主義イデオロギーなどの態度変数の性質が異なってきた現在の、改めて「政治ばなれ」に関わる心理変数の関係構造を明らかにする必要がある。しかしながら、政治的無関心など政治ばなれ現象を理解するための鳥瞰的なメタセオリーも見当たらない状

況である。このような政治ばなれ現象を理解するために、本報告では大学生被験者の自由記述を分析して、大学生の「政治」に対する認知、感情、態度の実態に関する資料としたい。まずは分析に入る前に自由回答や面接によって得られた「質的データ」をあつかう政治心理を対象とした諸研究を概観しておく。

(1) 西平直喜（1964）の FMS 理論の実証の一環として

西平（1964）は、60年代の青年心理、とりわけ基本的社会的態度を理解する枠組みとして、当時の日本社会の歴史的、社会的特色を分析し、その上で FMS 理論を提唱した。FMS は、青年の行動様式、人間関係、生活感情、倫理観、政治的態度を理解する枠組みであり、F 型要因（Feudalistic, 家父長制度的・封建的要因）、M 型要因（Mass Society, 大衆社会状況が生み出す、あらゆる心理学的要因）、S 型要因（Socialism directed, 社会主義的指向的な諸要因）の 3 要因が提唱されている。西平は、当時の青年に見受けられた同一視間の葛藤（例：権威を否定しつつも、行動レベルでは年長者や偉い人の前にでると固くなる）を面接記録や学生によるレポートを資料として、精神分析的概念による理解をおこなった。

(2) 原田唯司（1982）の政治的態度の面接

原田（1982）は、青年期の政治的態度に接近するために、質問紙調査にくわえ、面接調査をおこなった。面接時期は 1979 年であり、国立大学一年生 12 名を対象者とした。面接内容は次の通りであった。政治に対して、「保守的か革新的か」の自己認知、政治に対する意見や考え方、政治への関心や満足度の程度、政治的行動を実行した経験の有無、政治的行動を実行する意志の程度であった。対象者はすべて革新政権を希望し、今の政治の在り方に対し、強い不満を持ち、政治体制の非民主性、腐敗、政治家不信を理由とする。これらの現体制の欠陥を除去した民主主義を徹底した政治体制への変革を希望していることがわかった。これらを通じて、政治志向と政治への関与は比較的独立した変数関係にあることを示唆した。

(3) 原田唯司（1998）による大学生の政治不信の自由記述分析

前項と同様、静岡大学の原田氏による青年の政治意識に関する最新の研究である。この研究は、自由記述を通じて、研究蓄積の少ない青年の政治不信の領域とその内容の実態把握を目標として行なわれた。政治不信（political distrust）、すなわち国の政治や行政の在り方に対する不信感が具体的にはどのような見方・考え方や行動の仕方で表現できるか？あるいは政治不信が生じる原因や理由として思いつく事を記述させた。いわば、この研究は、大学生の政治不信の内容とその原因に関するしろうとの説明（lay theory）の析出を目指したものである。分析の結果、以下のようなカテゴリー化がなされた。

① 政治不信の領域と内容

政治家不信：(サブカテゴリーとして) 金権性・自己中心的行動・行動の非一貫性・否定的人格イメージ

行政不信：不透明性・自己中心的行動・国民軽視

政党不信：基本理念の放棄・選挙対策至上主義・離合集散・公約の不履行

② 政治不信の結果としての心理

サブカテゴリーとして、無力感の増大・主観的距離感の拡大・興味・期待の喪失・行動の回避

③ 政治的不信の背景を構成する要因

内的要因：私生活主義・未熟・社会経験の不足・他者依存意識・知識の欠如・おとな社会に対する不信感

外的要因：政治の不安定性・政治システムの複雑さ・マスコミの一面的報道

これらの概念の多くは、心理変数であり、測定可能である。政治不信を中核にして、各概念の因果関係を仮設しており、したがって実証的に因果関係を検討する事も可能である。

(4) 居安正(1986)の大学生によるレポート分析

政治的な書物の感想レポートに自発的に記されていた内容を分析したものである。対象となった大学生は、昭和41年から42年に生まれ、小学校5年生の時にロッキード事件に遭遇している。このレポートは昭和61年(1986)に課されたようである。示唆に富む分析であるので内容を紹介しておく。

- ① 多数の学生がテレビの影響のもとに政治的な事件に触れていた。
- ② ロッキード事件を契機に政治に関心を持つが、それは政治への不信と嫌悪へと育まれ、政治的無関心へと導かれていた。
- ③ 全体から見ると少数であるが、政治に関心を持つと仲間内で奇妙にみられるという雰囲気を感じ報告するものもいた。
- ④ マスコミから政治への不信感、嫌悪感を植えつけられながらも、成人に至り、選挙権を得る年齢に達したので、政治を理解し関心を持つとうとするが、新聞を読んでも分からないし、政治の動態が不可解を極めるといったふうに、訳の分からないマスコミやジャーナリズムの価値観に違和感や嫌悪感が一部に生み出されていた。
- ⑤ 政治についての具体的見聞(地方利益誘導型の政治、親が頼まれた人に投票する、ムラ社会的な後援会を中心とする世話活動など)がオトナ社会への幻滅と共に政治的無関心を醸成したとする学生もいる。
- ⑥ 自民党と野党のなれ合い政治を国民が許容している事などから、無力感やあきらめ、関心を持つ事のバカバカしさ、投げやりな感情を感じている。

- ⑦ 政界を取り扱った小説や漫画，映画を結構楽しんでいる者も多くいるが，その多くは傍観者的，観客的関心を持つものである。
- ⑧ スーパーマン的政治家，歯の浮くような理想論を説く政治家に票を預け，思い切りだまされてみたいものなどと，いわゆる政治腐敗→疎外の進行→何かのきっかけで民衆が熱狂する→ファシズム的危機を連想，想像させるような少数意見もある。

(5) 池田謙一（1997）の政治スキーマ論

これまで紹介した諸研究とは異なり，認知社会心理学の立場から投票行動を説明しようとする研究である。スキーマ（人間を情報処理系と見なした場合に，その情報処理の枠組みとして用いる知識体系でネットワーク構造をなしていると考えられる）概念を投票行動研究に応用したものである。自由回答文を文節単位に区切ってコンピュータを中心とする処理（オートマティックに処理される訳ではなく，複雑で労力を要する作業であると聞いている）を行ない，スキーマを抽出し，マスメディアの情報環境，ソーシャルリアリティ論の観点から分析を加えたもので，現在の政治心理学の中で，独創的かつプロミシングな研究方向の一つである。

以上の諸研究は，特定の理論的立場から，あるいは周到な調査計画と分析に基づくものであり，それらの水準に本報告は及ぶべくもないが，自由記述の分類という素朴な方法を通じて，先の衆院選当時に日本の政治に対して大学生がどのように考えていたかに関して報告を試みる。

方 法

1. 調査の概要

今回の分析の対象となるデータは，1996年10月22，24日に収集されたものである。講義時間を利用して，追手門学院大学学生に調査を実施した。被験者の内訳は，男子102名（平均年齢19.90歳），女子175名（平均年齢19.47歳），計277名である。

2. 調査時点の政治状況

調査時点前の政局は次の通りである。96年1月11日に村山富市首相にかわり橋本龍太郎首相が誕生している。また，調査の直前には9月28日には民主党が結成され，鳩山由紀夫，菅直人が代表となっている。10月20日に行われた衆議院議員総選挙が終わって，その2日から4日後にこの調査が行なわれた。この衆議院選挙は我が国初の小選挙区比例代表並立制によるものであった。選挙の結果，自民党が239，新進党156，民主党52，共産党26，社民党15，さきがけ2，その他が10という議席配分となった。この選挙においては，小選挙区で落選した候補者が，比例区で復活当選するなど，制度上の問題点が指摘された。近年，これまでも低投票率が問題とされてきたが，当該選挙においては小選挙区での投票率が59.65%，比例代表区で59.62%と過

去最低記録であった。

3. 質問紙の内容

東・西道(1996)で作成したキャッチフレーズ形式による態度尺度, 支持政党に関する質問, 田中(1992)の開発による積極的支持なし層, 単純支持なし層に分ける質問項目に変更を加えたもの(東, 1997), 西道実による10票配分法(国際経済労働研究所, 1994), 原田(1985)の政治的関心尺度を3件法に変更したもの, そして, 政治的状況に関する自由記述である。なお, このデータに関して, 無党派層の観点からの分析が, 東(1997)に詳細を報告している。

4. 自由記述の施行方法

質問紙の末尾に, 「日本の政治や各政党についてあなたの考えや感じている事を以下にお書きください。」と教示し, 縦9cm横13cmの枠内に, 10分以内に記述をさせた。

5. 分類の方法

自由記述の分類方法として, 本研究では, 次のような方法をとった。分類作業は, 筆者自身が単独でおこなった。まず, 政治に対して, 肯定的-否定的の評価軸を想定し, その評価軸にそって大まかな内容分類をおこなった。この第一段階の大まかな分類に要した時間は, 計30時間程度を要した。次に, 第一段階の分類で, 大まかな内容わけが可能とおもわれたため, 8個から10個程度の内容に粗く分類を試みた。この手順に要した時間は, 計30時間である。最終段階として, 各カテゴリー内の自由記述を再度検討し, カテゴリーの結合や細分化を試みた。これに要した時間は, 計20時間程度である。なお, 以上の作業は, 各段階で2, 3週間の間が取られている。以上の分類作業の結果, 8個のカテゴリーに分類をすることができた。この作業全体に要した時間は, 延べ80時間前後であった。

結果と考察

1. 分類されたグループの記述内容について

最終的に設定された10カテゴリーの内容を, 記述例を引用しながら考察する。以下では, 被験者全体でカテゴリー度数の多い順に列挙した。

「問題点の指摘」グループ(男性33.3%, 女性28.7%)

当グループの回答の内容はバラエティにとんでいた。しかし, 今回の分析では更なる下位分類が行なえなかった。そのため, 合切袋的なカテゴリーとなった感があることを認めておきたい。さて, 全体的に一貫することは, 現在の政治状況や先だっで行われた衆議院選挙に関して, 種々

東：政治に関する大学生の自由記述の分析

の問題点や感想を述べているという点である。データ収集に先立って、数日前に行われた衆議院選挙の講評といった感じである。また、批判的な評価であっても、感情レベルでは、比較的冷静な感想といった感じがうかがえる。

言及された問題点の例を挙げると、比例区および小選挙区の重複立候補に対する否定的評価、消費税率と福祉との関係についての言及、各政党の選挙公約に対する評価、戦後最低であった投票率に対する感想、選挙民の投票基準の如何について、国民の政治に対する意識、マスコミと選挙などであった。また、評価だけでなく、具体的な提案も比較的多くみられ、洗練された回答が多い。これは、データ収集の中心となった状況が筆者の授業であったこともあり、学生の回答に対するコミットメントも比較的高かったのか、あるいは講義課題に答えるような感じの受け取りがあった可能性もあると推測される。それでは、以下に回答例を紹介する。なお、カッコ内は、年齢および性別である。

選挙制度について：

「小選挙区、比例代表制の並列で行なわれたこの選挙は奈良一区のように、一つの地区において、3人もの当選者を出すという奇妙な結果を引き起こした。果たして奈良一区の有権者である市民はこの結果に納得していたのだろうか。60パーセントを下回る過去最低の投票率は、市民の不満やあきらめを如実にあらわしているといえるだろう。(20歳男性)」

消費税率について：

「今度の選挙で消費税の引き上げ反対の立場に立つ政党が多かったが、どのようにして足りない分を補うのかについての説明があまりなされていなかったように思う。具体的に数字を打ち出して示してあげなければ真実味がない。(20歳女性)」

「公約などが消費税5%や0%などといった目先のことでどういうメリットがあるかははっきりしない。なぜなら所得税を下げても消費税を上げても、国鉄の負債は住専以上で国民一人当たり10万円くらいの負担になるのにどのように捻出するか分からない。その他にも所得税を下げ、消費税を上げると金持ちばかり金持ちにという構図がなりたちそうだからいやだし、それよりは、相続税とか贈与税をまず下げたりするべきだと思う。あと今回の選挙では国際情勢に関する公約はなかったのでちょっと物足りなかった。(19歳男性)」

「今、消費税を上げるか上げないか、いろいろともめています。正直言って、3%が5%になっても私たちはすぐ慣れると思います。でも、そういう流れみたいな雰囲気は私はとても嫌いです。(19歳女性)」

マスコミ批判：

「国民の大きな政治不信の原因は、マスコミにあると思う。とにかく日本のマスコミは、事実認識以上のものを国民に与え、政治不信を必要以上に煽っていると思う。(21歳男性)」

共産党について：

「個人的には共産党をおしている。昔の共産主義ではないのだから、共産主義のイメージを変えるため、この党こそ名前を変えるべきだ。(22歳女性)」

「〇…日本の政治家は悪人が多いと思うが、そんな人に投票する有権者も悪い。(ここで項を改めて) 〇共産党は裏献金などの問題がないので好きです。共産党が第一党になっても今更日本が共産主義国になるとは考えられないので。選挙権を得たら比例代表に投票する時は共産党にいれると思う。(19歳女性)」

「僕は共産党を支持しているが、それは日本を共産党国家にしたいと思っているわけではなく、その他の政党はどれも同じようなことを言っていて一緒だからだ。この国はアメリカの51番目の州だといわれても仕方がない。僕にはこの事が悔しくてたまらないから、日米安保条約には非常に憤りを感じている。そのため日米安保に反対している共産党を支持しているのである。(18歳男性)」

「自民党一党独裁体制が崩れてしまった今、どうにかしなければというだけで、誰もが右往左往していると思う。新しく出てくる政党も何がどう違うのかわからない。民主党にしる、菅さんなどのスター政治家を掲げるだけで、いまいち内容がはっきりしない。マスコミの宣伝だけで、いい政党に見えるところも問題ありだ。(20歳女性)」

その他：

「どの政党にも関心がなく、期待もしていなかったが、そんな中でも、よりベターな政党があるだろうと最近はずっと関心がでてきました。でも今回の選挙ではどの政党もスローガン、公約に個性がなく(共産党には個性を感じるが理想に対して具体策がないのは他の政党と同じ)、やはり支持政党を見つけることはできませんでした。政党より個人に注目して、今回投票しましたが、僕の選挙区ではタレント議員が当選したことがガッカリです。グチを言ってるだけではダメ。選挙に行きましょう。(22歳男性)」

「行政改革についてはぜひやってもらいたい。具体例をあげると北海道開発局など官僚にアンケートを取ってさえ必要ないと言われている省庁が多くあるのは納得できない。バブルと氏に行政改革が行なわれるべきだったが、税収が伸びていて注目されなかった。今が絶好の機会である。(21歳男性)」

「選挙の時の「お願いします」は、すごくおかしいと思います。市民の代表なのだから、私達がお願いして議員となる人に私たちの生活がより良くなるように国政で頑張ってもらわなければならないはずで。(20歳女性)」

「現在の日本の政治はかなり問題があると思う。以前は、自民党と社会党が対立していたような感じだった。資本主義と社会、共産主義という図式があったが現在は自民 VS 新進という感じである。しかし新進党という政党は自民、共産、社民のようにはっきりしたカラーがない。民主、さきがけなど新しい政党もだ。もう少し政策などをはっきりさせ、独自のカラーをはっきりと出せばもっと分かりやすくなると思う。(19歳男性)」

「今回の選挙では消費税の問題ばかり取り上げられて沖縄の基地問題や住専問題は忘れられていた。消費税を上げたくない政治家があんなにいて何故引き上げが決まったのか理解に苦しむ。これでは外国の

東：政治に関する大学生の自由記述の分析

人たちに「経済は一流、政治は三流」といわれても仕方がないだろう。(19歳女性)」

「政治家不信」グループ (男性 13.1%, 女性 18.4%)

政治家一般について、信用できない、期待していない、という拒否的な見解を述べるグループである。政治家＝金もうけというステレオタイプが形成されているグループで、その内容は、自分の利益ばかり考えている、公約を守らない、公約がうさんくさい、実行不可能な公約をいうなどの意見で占められている。

「今の政治家は、どれくらいの人の本気で日本社会のことを考えているのかわからない。自分の利害が、結局一番優先されているように見えてしまう。それが偏見かどうか判断できないほど、政治家や政党が遠い存在に思える。(19歳女性)」

「(政治家の多くは) 東大とか京大卒らしいけど実際は頭のわるいおやじの集まりとしか思えない。(20歳女性)」

「テレビや新聞でみると、政治家たちはゲームをしているようだ。権力がなければ、政治を司ることができないのはよくわかるが、彼らは権力をとること自体が目的化しているように思える。(19歳男性)」

「議員の言っていることが信じられない。人間なんだから誰にでも失敗はある。その失敗をどうして認めて国民に謝ろうとしないのか。何もなかったかのようにひょうひょうとして選挙に出る。これでは国民はついてこない。そもそも今回の選挙方法もよくわからない。何故ゴーストが出るのか。これは見直すべき。(20歳男性)」

「とても関心はあるけれど、政治家は魅力がない。自分中心でよく約束できないことやよく調べていないこと、知りもしないことでも自分のためならうそがつける。国民よりも自分のみを守ることや、党内の自分の位置やお金もうけのばかりが目につく。信用ならない。(20歳女性)」

「政策や公約はあまり信じていないし、期待もしていない。(20歳女性)」

「政治家ヒマそうで良いと思う。あんなんでも給料もらえるならなりたいたいくらい。政治家そう入れ替えしたいぐらい、毎回同じ。特に小選挙区で落ちたのに比例代表で受かる人、2位で落選とかなら許すけど、最下位の人を受かるなんてフシギすぎる。(20歳女性)」

「選挙の時に政治家の言っていることって信用できない。当選するために口で言っているような気がする。(21歳女性)」

「物心ついたころから政治不信をおおるようなことしかなかったの、どうも政治嫌いという感を払拭できないでいる。公約などもよいことが実行された例はまれだし、このままでは政治家＝お金儲けのための手段としか考えられなくなってしまう。(18歳女性)」

「政治家＝悪者という考えしか思いつかない。なんとなく政治の世界はなんだかいやなものだと思うだけ。(19歳男性)」

「政治家は自分たちの利益だけを考えて政治を行なっているようにしか思えない。(19歳女性)」

金権政治家というステレオタイプは、自民党議員を中心的なアクターとして形成されていたと思われる。今回の分類作業を通じて感じた事は、先のステレオタイプは、ほぼ政治家全体に共通するものとして形成されているように感じられた。これは、昨今の政党の離合集散、共産党を除く全政党に与党経験があるという経緯の産物ということだけでもないだろう。このように態度構造（あるいは認知構造）が単純化する要因として、対象に対するコミットメントや関心の低さ、さらに対象に関する知識量の少なさ、認知的処理の困難さが考えられる。以前に比べて、上記要因が強く働くようになったのであろうか。

また、タレント議員や二世議員批判も見受けられる。

「有名人とか（力士とか）政治家になるのもなんか嫌いだ。ろくな事できそうもないのに、人気だけで当選して、僕らの税金とか無駄につかってしまうのでないか。（19歳女性）」

「政見放送をみても、本当にちゃんと考えているのかあやしいようなタレント議員候補がいてびっくりした。そんなんでいいのかと思う。（19歳女性）」

「二世議員とかやたらと高齢の候補者がでるあたり、かなり（政治家は）おいしい商売なのだろう。金持ちが議員になるのはともかく、議員になったとたん金持ちになるのは許せない気がする。（19歳女性）」

「タレント議員は許せない。なぜ、当選するのかさっぱりわからない。立候補する方もするほうだが、当選させるのもさせる方だ。腐っているのは官僚だけでなく、国民もそうなのだろうか。私ははまだ選挙権はないが、タレント議員や二世議員をなくしたいと思う。（18歳女性）」

「よくわからない」グループ（男性 8.1%，女性 14.9%）

政治がよく分からないとするグループである。政治自体が複雑すぎ、最近変化が激しいので、判断できない、どう考えればよいかわからないなど、政治に関する判断、知識、能力がないので選挙で投票選択ができないことに言及する。

「消費税を増やす理由をきっちり言ってほしい。じゅうせんがわからない。（19歳女性）」

「政治について興味がなく、よく分からないので、あいまいな投票もしたくない。（20歳女性）」

「どの政党がどのような政策をとっているのかが、すべての政党について完全に理解しにくい。（19歳女性）」

「複雑でよく分からない。どの政党も、いまいち信用がおけない。（20歳女性）」

「今回の選挙は、多少政見放送をみたりしたのですが、結局よく分からないという感じで投票にいきませんでした。（22歳女性）」

また、政治的疎隔感の点から、自分とは全く関係がないこと、わかりたいと思うが、実際に

ニュースを見たりする気がおこらない、つまらない、身近に感じられない、自分の生活にどのように関係しているのか分からない。感覚的にわからないという感じであるようだ。多くの場合、不信感や期待感のなさも伴っている。

「はっきり言って何がどうなっているのかさっぱりわからない。どこがいいとか悪いとかもよくわからない。あまり興味がないけど楽観的でもない。どうにでもなれって感じです。(21歳女性)」

「政治に対するイメージは、とてもあやふやで遠いもの。私にはさっぱりわからないし、わかりたいとも思わない。議員たちは得体の知れない人。テレビなんかでみるだけの人を全面的に信用なんてできない。(19歳女性)」

「自分とは全く関係がないこと。どうでもよい。政治のしくみがどうなっているのかさえわからない。わかるようになりたいと思う気持ちもあるが、そのためにニュース、新聞などをみようとする気は全くおこらない(20歳男性)」

「今の政治は一体私たちの生活にどんな影響を与えているのかわかりません。各政党の政策や公約はただの飾り付けとしか思えません。私は今の政治を全く信頼していません。何も望むことはありません。(19歳女性)」

「関心を持ちたい」グループ（男性 4.0%，女性 5.2%）

投票をしなければならない、友人と政治について話しをする、選挙があればいろいろと情報収集して投票したい、投票に初めて行って興味をわいた、いずれ積極的に政治について意見をいえるようになりたいといった順社会的、道徳規範遵守的な意見を示すグループである。

「まだ政治に興味はありません。しかし、こういう若者は政治を変えるような一票を投票しなければならないと思う。(18歳男性)」

「先日、サークルの先輩と選挙の話になって、いろいろと説明してもらいました。次回、また選挙があったら、先輩と話し合ったりして、もう少し自分の中で政治を重視できる態勢を作りたいと思いました。(18歳女性)」

「今回初めて選挙に行って、政治というものに少しだけ興味がでた。(21歳女性)」

「私は政治についてあまりにも何も知らなさすぎる。でも選挙権を持ったら、やっぱり、投票はするべきだと思っている。(19歳女性)」

「政党の離合集散批判」グループ（男性 3.0%，女性 10.3%）

昨今の政党の離合集散によって、共産党以外の政党の政策がはっきり区別がつきにくい。被験者にとっては、昔に比べて、どれもよく似ている、それぞれの個性がないと映っているようである。そのために、政治の面白味や関心もうすれ、支持したい政党がないというグループである。

「どの政党も似たりよったりで、各政党のカラーというものがはっきりみえない。この政党なら、これができるというものがない。そうなると政治の面白味もないし、ますます関心が薄れる。(19歳女性)」

「よく言われるように、昔に比べて各党の特徴がなくてわかりにくいと思う。(21歳女性)」

また、政権を取りたいが故に、まったく主張の異なる政党が連立政権をくむことや、議員の私欲（選挙で生き残ること）のために、政党が離合集散する（選挙のための政党）ことによる混乱を批判する。

「国のためではなくて議員の私利私欲のために政党の離合集散が行われるのがいやだ。(20歳男性)」

「変わらないのでは…」グループ（男性5.1%，女性5.2%）

選挙が終わっても結局変わらないというあきらめの気持ち、いろんな改革が行なわれたとしても何も変わらないのではないかと、今のままでは何も変わらないのでは、いろんな公約を言っているが、どの政党が政権に就いてもなにもできないのではというように、無意味性、無力性を訴えている。

「国民も結局、何も変わらないというあきらめの気持ちでいると思う。(19歳女性)」

「選挙でどんなことを言っても、結局、政権を握れば同じ事をしようという気がします。(20歳女性)」

「どんな政治家が出ようと、どこの党が勝とうと結局政治は変わらないようなイメージがある。(欠損データにより性別年齢不明)」

「今の政治だったらあまり日本が変わらないような気がとてもするから、有権者であってもあまり投票はしたいと思わない。(19歳男性)」

「怒っている」グループ（男性11.1%，女性1.7%）

言葉づかいが荒く、政治家の無能さ、モラルの無さについて、きつい表現で侮蔑し、怒りを表明するグループである。

「政治家はろくな生き物ではない。(欠損データにより性別年齢不明)」

「くさっている。よく国が破綻しないで旨く言っていると感心する。(22歳男性)」

「政治屋なんて誰も信用できねえ!てめえら絶対オレらの代表じゃねえ!!! (19歳女性)」

「バカばっか。(19歳男性)」

「短めの要望」グループ（男性7.1%，女性3.4%）

東：政治に関する大学生の自由記述の分析

文尾が「…してほしい」で終わるグループである。政治家や政府に対して、比較的抽象的な要望を述べるグループである。

「公約した以上はやりぬいてほしい。(21歳女性)」 「有言実行の心でお願いしたいです。(20歳女性)」

「増税するんじゃなく少しは減税してほしい。環境問題に力を入れてほしい。(19歳男性)」

「自分たちのことばかり考えないでもっと国民のことを考えてそれを実行してほしい。(22歳女性)」

「ブラックユーモア」グループ (男性 9.1%, 女性 2.3%)

平均的な水準よりも、政治に関する情報を持ち、自分の意見がある。自分の意見といっても、観念的であるが、皮肉っぽい。ここでは、ブラックユーモアとネーミングしてみた。

「自民党以外の政党は、消費税廃止を売り物にしてきたが、まったくうそはったりもいいところだ。日本自体のばくだいな借金を返すために、消費税制を作ったのにそれを廃止するだと、まったく矛盾した話だ。寝言は寝てから言え。消費税は確かになくしてほしいけど。自民党に関していえば、もっとひどい。何が夢のある政治、国をつくろうだ。あほか。てめえらがつくってきた政治のおかげで、夢も希望も何もあやしねえよ。(22歳男性)」

「弱いところが好きだ。西武ライオンズが全盛の頃のロッセオリオンズがたまらなく好きだった。とにかく力をもっているところが嫌いである。私の支持する“さきがけ”。与党なのに全然目立たないところがいい。役に立たないところがいい。目立ったと思ったら、分裂の危機だったところがいい。“さきがけ”なのにさきがけてないところがいい。(19歳男性)」

「とやかく言っても結局は自民党の天下になってしまった。これはひとえに戦後長らく続いた自民党独裁政治のせいだろう。高齢の人は“寄らば大樹の蔭”とやらで自民党に投票してしまうのだろう。かてて加えて現代の若い人は“選挙なんてくそくらえ、投票したって変わりゃしない”という一種アナーキー的な考えがまんえんしているのかと思う。もうだめだね。けけけけ。(18歳男性)」

「無回答」グループ (男性 6.1%, 女性 9.8%)

解答欄に全く回答していないグループである。全被験者中で、8.4%を占める。

2. 自由記述回答グループと性差

どの回答カテゴリーが、どの程度の頻度で出現したかを性別ごとにまとめたのが表 1-1, 1-2 である。男女とも、もっとも出現頻度の高いカテゴリーは、「問題点の指摘」であった。政治に対する大学生の態度表明の第一は、現下の政治状況の問題点を指摘する事であるといえよう。第二に頻出したカテゴリーは男女とも「政治家不信」であった。両カテゴリーを合わせると、不信を募らせるような問題のある政治状況であると認識しているものが男女とも 46% あたりの割合

表1-1 自由記述の出現度数と比率（男性の場合）

	男 性	構 成 比
問題点の指摘	33	33.3%
政治家不信	13	13.1%
よく分からない	8	8.1%
関心を持ちたい	4	4.0%
離合集散批判	3	3.0%
変わらないのでは…	5	5.1%
怒っている	11	11.1%
短めの要望	7	7.1%
ブラックユーモア	9	9.1%
無 回 答	6	6.1%
合 計	99	100.0%

表1-2 自由記述の出現度数と比率（女性の場合）

	女 性	構 成 比
問題点の指摘	50	28.7%
政治家不信	32	18.4%
よく分からない	26	14.9%
関心を持ちたい	9	5.2%
離合集散批判	18	10.3%
変わらないのでは…	9	5.2%
怒っている	3	1.7%
短めの要望	6	3.4%
ブラックユーモア	4	2.3%
無 回 答	17	9.8%
合 計	174	100.0%

を占める。

顕著に性別で出現比に違いが見られたのは、「よく分からない」であり女性の方が比率は高い。一方、「怒っている」や「ブラックユーモア」群は男性の占める割合が高い。政治に関する言語的攻撃の度合いは女性より男性の方が強いということであろう。

3. 自由記述回答グループの政治的態度の強度差

自由記述8カテゴリーのグループ別に、新政治的態度尺度（東・西道，1996）の平均値差があるかどうかを一元配置分散分析で検討した。本来ならば、性別も独立変数に加えた二元配置分散分析を用いるべきであろうが、ここでは、人数も多くないことにくわえ、カテゴリー自体が筆者の主観的分類によるものであることから、この検定はあくまで一つの目安である。さて、その結果、政治腐敗批判尺度と原田（1985）の政治的関心尺度において、0.1%水準で平均差が認められた。

政治腐敗を批判する傾向がもっとも強いのは、「怒っている」群（平均値 19.929）であった。政治腐敗を批判する傾向が弱い群としては3つあり、「無回答（16.876）」>「関心を持ちたい（16.692）」>「変わらない（15.786）」という順序で傾向が弱くなっていた。無回答や「政治の状況は今と変わらない」という記述の背景には、政治的無関心や無力感や無意味感が存在していると推測される。つまり、現状の政治腐敗に対する批判をしても意味がないとする傾向があると考えられる。一方、「関心をもちたい」というグループが、政治腐敗傾向が低い理由は、調査時の選挙ではじめて関心をもちたいと思った群であり、したがって、政治腐敗を追求し批判する態度が形成されてはいなかったと考えられる。また、成人（有権者）としての社会的要請に「すなおに」従おうとした結果、政治に関心をもちたいということではないかと推測される。その意味では保守的（順社会、現行社会に適合的）でもあるように想像される。

政治的関心が最も高い群としては、4群存在する。政治的関心が高い順に序列化してならべる

と、「問題指摘（平均値：12.795）」について「ブラックユーモア（12.692）」、「関心をもちたい（12.385）」と「政党の離合集散批判（12.286）」の順となる。「関心をもちたい」群が政治的関心が高いのは当然である。他の群においても知識を前提とした記述が可能であったのは、政治的な情報関心が高かったからであろう。

4. 自由記述回答グループの政党支持の様態

ここでは、自由回答グループ別に政党支持率を求めて検討した。政党支持特定化の方法（支持する政党を質問し、支持なしと答えた人に好きな政党を再度質問して、好きな政党を答えた場合は支持者とみなす）の詳細については、東（1997）に具体的手続きを記載しているので、必要な場合には参照されたい。クロス集計の結果、セル度数が極端にすくなくなったため、解釈に危険が伴うが、表2に従い、各グループごとの政党支持率（カッコ内）が顕著に高いところだけをピックアップして敢えて解釈した。なお、自由記述の類型を被験者の態度（attitude）の名義尺度水準の測定値と見なすと、政党支持は行動と見なすことになる。これは、態度が行動の予測因だからである。表2内のカッコ内の％を横方向に％を求めているのは、自由記述分類変数を原因変数、政党支持を結果変数と見なしているわけである。しかし、これは一つの見方にすぎず、逆（自由記述分類変数を結果、政党支持を原因）あるいは全度数を分母とし、各セル度数を分子としても積極的に否定する理由が見当たらない。一応、ここでは、自由記述分類変数を原因、政党支持を結果と見なしていることに留意の上、下記の要約を見ていただきたい。

- ① 「問題点の指摘」では大体の政党支持に度数がバラツキがあるが、民主（22.9%）、新進（18.1%）、積極的政党支持なし（18.1%）・消極的政党支持なし（16.8%）に分類される学生が多い。また、自民党や共産党支持者も9.6%づつ含まれている。
- ② 「政治家不信」では、消極的政党支持なし（33.3%）積極的政党支持なし（26.7%）である

表2 自由記述カテゴリー×政党支持のクロス表

	自民党	新進党	民主党	新党さきがけ	社会党	共産党	積極的支持なし	消極的支持なし
問題点の指摘	8 (9.6)	15 (18.1)	19 (22.9)	2 (2.4)	2 (2.4)	8 (9.6)	15 (18.1)	14 (16.8)
政治家不信	2 (4.4)	3 (6.7)	6 (13.3)	0 (0.0)	4 (8.9)	3 (6.7)	12 (26.7)	15 (33.3)
よく分からない	5 (14.7)	0 (0.0)	4 (11.8)	1 (2.9)	1 (2.9)	1 (2.9)	6 (17.6)	16 (47.1)
関心を持ちたい	0 (0.0)	1 (7.7)	0 (0.0)	0 (0.0)	1 (7.7)	2 (15.4)	7 (53.8)	2 (15.4)
離合集散批判	7 (33.3)	2 (9.5)	2 (9.5)	0 (0.0)	1 (4.8)	3 (14.3)	5 (23.8)	1 (4.8)
変わらないのでは…	1 (7.1)	2 (14.5)	2 (14.3)	0 (0.0)	0 (0.0)	3 (21.4)	4 (28.6)	2 (14.3)
怒り	2 (15.4)	0 (0.0)	2 (14.3)	0 (0.0)	0 (0.0)	3 (21.4)	4 (28.6)	3 (21.4)
短めの要望	2 (15.4)	1 (7.7)	3 (23.1)	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	5 (38.5)	2 (15.4)
ブラックユーモア	1 (7.7)	1 (7.7)	1 (7.7)	1 (7.7)	0 (0.0)	5 (38.5)	1 (7.7)	3 (23.1)
無回答	2 (8.7)	1 (4.3)	1 (4.3)	0 (0.0)	2 (8.7)	4 (17.4)	5 (21.7)	8 (34.8)
合計	30 (11.0)	26 (9.5)	40 (14.7)	4 (1.5)	11 (4.0)	32 (11.7)	64 (23.4)	66 (24.2)

注) カッコ内は横%

学生が多い。政治家不信層の約半数は政党支持をもたないのである。

③ 「よく分からない」では、消極的政党支持なし（47.1%）が半数近くであり、現在の政治がよくわからないから、「消極的な意味で」政党支持を持つことができないようだ。

④ 「関心をもちたい」では、積極的政党支持なし（53.8%）が多く、政治に関心を持つ政治的社会的過程で、積極的政党支持なし層（いわゆる無党派層）であることを選択させやすくする要因が何かあるのではと思われる。

⑤ 「離合集散批判」では、自民党（33.3%）支持が多い。政党の離合集散は二大政党制など自民党と対抗しうる政党を生み出すために生じたといえるので、自民党にシンパシーを感じる学生がそれを批判するのは理解できる。

⑥ 「怒り」では、積極的政党支持なし（28.6%）・消極的政党支持なし（21.48%）に分類される学生がほぼ半数を占めている。現在の政治に対して憤りを感じるから、特定政党を支持する気にならないようだ。

⑦ 「ブラックユーモア」では共産党支持（38.5%）が他の群に比べ、相対的に多い。政治に関心と知識をもっているがゆえに、彼らから見て、非論理的で現実まみれ、汚れすぎた他の政党は支持するに値しない。それらに対抗的反対意志を表明するために共産党を支持あるいはシンパシーをもっているのではないか。なお、共産党支持者の中でもっとも多い自由記述は、「問題点の指摘（8名）」である。ブラックユーモア（5名）は他の群に比べて、相対的に共産党支持者の中に出現比率が高いということである（「問題点の指摘」に次いで2番目に度数が多い）。

⑧ 「無回答」では消極的政党支持なし（34.5%）が多く、消極的政党支持なし層は政治に関心を持たず、主張や意見に乏しい学生が多いといえよう。

前述したように、%を行方向にとるか列方向にとるかの選択の如何が、結果の解釈に影響を与えるので、参考として、行、列の周辺度数による一種の標準化を行なう双対尺度法（dual scaling）を表2に適用した。表3に示した重み係数から、表2が持つ縮約情報は次のように読み取れよう。消極的政党支持なし層は、「よく分からない」と答えたり、「無回答」をしたり、「政治家不信」を記述する傾向が特徴的であった事がうかがえる。さらに共産党支持層には、「ブラックユーモア」的記述をする人が相対的比率において他の層よりも多いことが分かる。

表3 自由記述カテゴリーと政党支持別の双対尺度法による重み係数

	成分1	成分2
問題点の指摘	1.022	-0.641
政治家不信	-1.017	-0.541
よく分からない	-1.417	-0.423
関心を持ちたい	-0.690	0.746
離合集散批判	0.965	0.557
変わらないのでは…	0.823	0.749
怒っている	-0.075	1.12
短めの要望	0.356	-1.428
ブラックユーモア	0.655	3.220
無回答	-1.123	0.915
自民党	0.558	0.093
新進党	1.729	-0.734
民進党	0.872	-1.146
新党さきがけ	0.957	1.401
社民党	-1.468	-0.247
共産党	0.584	2.466
積極的支持なし	-0.260	-0.145
消極的支持なし	-1.308	-0.158

結びにかえて

最後に各カテゴリーの男女別比率について概観をしておきたい。まず「問題点の指摘」グループに分類された被験者が最も多かったことから、政治に関心を持たない或いは持てない大学生が人口比率の上で最も多いとはいえないことが示唆される。この結果には国民の関心を集めた国政選挙直後という状況下で、被験者らの政治的スキーマが活性化されていたことや選挙後の社会の変化に意味を付与しようとする動機づけが高くなっていたことも反映していると考えられる。一方で、政治不信群と考えられる、「政治家不信」・「怒っている」・「政党の離合集散批判」・「よく分からない」・「変わらないのでは…」・「ブラックユーモア」の6グループの合計は、男性49.5%、女性52.8%となり、青年層の半数近くに政治不信が広がっていることがうかがえる。その他の群に分類された中にも該当する者が多数含まれているので政治に不信感をもつ層は実際には過半数を超えることだろう。なお、その内「よく分からない」・「変わらないのでは…」といった政治的疎外感（無力感、疎隔感、無意味性など）を感じていると考えられる層の比率は、男性13.2%、女性20.1%である。無回答群は、いわゆる無政治的（apolitical）層と考えられ、男性6.1%、女性9.8%であった。

さて、自由記述の分析は、今後の研究方向や仮説を探索するためになされることが多い。ここでは、新たな方向性や仮説を明示するほどの解釈が行ない得なかった。だが、記述の中には思わずひざを打ちたくするような見事な記述が数多く散見されたことから、筆者を含め、政治心理に関心をもつ研究者が暗黙のうちに前提としていた「最近の若者」は政治に関心をもたない、無政治的だとするステレオタイプの認識は、実態に即していないようである。まずは研究対象の実態を把握することが研究の出発点であることを再認識させられた。少なくとも今日の青年の政治的社会化や態度や認識のありようを垣間見ることのできる資料としてはヴィヴィットで興味深いものであった。

今後は、これらの自由記述から調査用の変数を設定することも可能であろう。さらには、これらの政治心理を理解するための（メタ）セオリーの設定が、政治的態度研究を記述的段階に留めさせないためにも必要である。分析を通じて、青年期を含めた発達段階からの視点の重要性をあらためて認識した。この視点を加えた政治心理を理解するメタ的な枠組みについては稿をあらためて論じたいと考える。

引用文献

- Fiske, S. T., & Taylor, S. E. 1984 *Social Cognition*. New York: Random House.
原田唯司 1982 青年期における政治的態度に関する一研究 教育心理学研究, 30, 12-12.
原田唯司 1985 政治的態度の構造と政治的関心, 政治的知識の関係について—大学生の場合—

- 教育心理学研究, 33, 327-335.
- 原田唯司 1998 大学生の政治不信—自由記述記述を通じた分析 静岡大学教育学部研究報告(人文・社会科学篇), 48号, 273-287.
- 早川昌範 1994 政治ばなれの社会心理学 愛知学院大学文学部紀要, 25号(創立25周年記念号), 97-102.
- 居安 正 1986 若者の政治的無関心—学生のリポートから 現代社会学, 21号, 72-76.
- 池田謙一 1997 転変する政治のリアリティ 木鐸社
- 亀ヶ谷正彦 1995 スキーマによる政治的認知 栗田宣義編『政治心理学リニューアル』学分社
- 国際経済労働研究所 1994 報告「組合員の政治意識調査」国際経済労働研究 通巻842号, 21-36.
- 西平直喜 1964 青年分析 大日本図書
- 東 正訓 1997 無党派層の政治的態度に関する予備的分析 追手門学院大学人間学部紀要, 5号, 141-149.
- 東 正訓・西道 実 1996 キャッチフレーズ形式を用いた新しい政治的態度尺度の構成II 追手門学院大学人間学部紀要, 2号, 81-91.
- 田中愛治 1992 「政党支持なし」層の意識構造と政治不信 選挙研究, No. 7, 80-99.
- Tversky, A., & Kahneman, D. 1974 Judgment under Uncertainty: Heuristics and Biases. *Science*, 185, 1124-1131.
- 安野智子・池田謙一 1997 投票行動の社会心理学—90年代の展開から—, 選挙研究, No. 12, 28-40.

1999年10月22日 受理